

子どもの力

すくも
自主防災会だより

第16号



の命を守るすべをしつかり身に付けさせることにあることが当然のことと認識されました。

一方で、児童を中心に据えた小学校防災の諸活動が、単に学校内にとどまらず、学校を取り巻く校下各地区にも波及して、地域を広く巻き込みながら「地域全体の防災文化」の高まりにつなげていければ、さらに望ましいとの意見も出されました。そこには、迫り来る地震津波への対応を日ごろから真剣に考えてはいるものの、具体的な今一歩がなかなか踏み出せないでいる地域側共通の悩みなどもあったように思いました。いずれにせよ、咸陽小学校が全職員・児童をあげて取り組む本防災事業に、校下地区としてこれに積極的にかかわっていくことで、自らの地区における防災活動にもささやかな風穴をあけて、子どもたちに負けじと「一歩前進」する地区がひとつふたつと増えていけば、これこそが「災害に強い地域づくり」への第一歩となるのであつて、周辺地域にとつても大変意義深かったと感じています。

まず、本防災事業が狙いとするところは、児童に対し南海トラフ巨大地震に代表される大規模な地震津波から自ら

宿毛市西部、海の近くに立地する咸陽小学校の「開かれた学校推進委員会」において、平成26年度実践的防災事業推進指定校の話が具体的に出されたのは昨年のちようど今ごろであつたかと記憶しています。咸陽小学校が行うこの事業に、小学校校下地区としての協力を求められたものの、何をどうかかわっていけばよいのか？ 具体的にやるべきことは何なのか？ 手さぐりでの話し合いがスタートしました。

を集め続けている岩手県釜石市の小学校と中学校の奇跡的避難劇。甚大な被害を及ぼした東日本大震災で、釜石市では、児童生徒のほぼ全員にあたる約2,920人が避難して無事でした。すでに下校していた「釜石小学校」、まだ在校生だった「釜石東中学校と隣接する鶴住居小学校」、これらの対照的な二つのケース。奇跡的なこの避難劇に見える多くの教訓に、われわれ(学校や地域)がくみ取るべきものはたくさんありました。

また、今も防災教育の成果として、全国的に大きな注目

子どもたちは自らの命を守るとともに、率先避難者となつて周囲の人たちの命も救つていた。「津波は大丈夫」と避難をしるる祖父の手を引いて逃げたケース、小学校低学年の児童や、体の不自由な児童を高学年の児童が背負つて避難したケースなどがあつたといひます。何やら難しそうな「被害想定」なるものを前提とした防災が、ふたを開けてみると「想定外」として無残に打ち砕かれる中、地震津波が起きればとにかく逃げることを第一の目標に掲げて、それを徹底するだけの防災教育と訓練が大きな効果を発揮し、子どもたちは襲いかかる「想定外」を見事に克服すると

いう成果を世の中に示しました。子どもたちは想定データなど無関係に生き延びたのです。市内で大勢の大人が死亡・行方不明になる過酷な状況の中にあつて、子どもたちは学んだことを全員が忠実に実行したのです。

それにつけても、学校教育の持つ力は想像以上のものがあることをあらためて認識させられます。学校には子どもや周囲状況に応じて関心を引き起こし、身に付くように教えるノウハウがある。皆がやるなら僕もやるという連帯感や、いい集団意識と団結力もある。隣接する中学校や小学校(保育園も含む)は

普段から合同での津波避難訓練などを実施して連携する意識も育つていたようです。



西日本において、今世紀前

半には相当確率で生起すると予測される南海トラフ巨大地震、しかし、よく考えてみるとかなりの長期戦になることも予想せねばならず、腰を据えた地道な努力の継続が求められています。今後も、「子どもたちが中心の学校」に「学校を取り巻く地域」がひとつのコミュニティとなつて、共に向き合い相互に影響し合えば、当初はささやかな足がかりから始まるとしても、将来的には大きな防災力・減災力となつてわが身に跳ね返ると確信します。

あの年4月5日に執り行われた釜石小学校の卒業式で、校長は「卒業おめでとう」より先に、「自分の命を自分で守つてくれたことに感謝したい」と卒業生に伝えたと言いました。そして5月6日の入学式では、新1年生に「お兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒に、どう逃げるか勉強しようね」と語りかけたとのこと。あれから4回目の春が来ようとしています。卒業式や入学式にどんな言葉であの日が語り継がれているのか聞いてみたいと思うのは私だけでしょうか。

宿毛市自主防災会連絡協議会

役員代表 河野典生